

●司会

それでは第一部ということで今回まさにネイチャーポジティブ推進にあたって、企業の皆様、自治体の皆様に何か気づきの場になればということで、ミニセミナーを開催させていただきます。

今回の講師を務めますのは私ども CSV 開発機構上席研究員の近江でございます。

近江は自治体のグランドデザインであったり、エネルギー・ビジョン事業の策定、企業のプランディング等の戦略策定等をやる専門家として、私どもと一緒のメンバーとして、様々な地域の皆様、また、行政の皆様、企業の皆様と事業づくりというものをしている専門家でございます。

それでは近江からお話を申し上げます。近江さんお願ひいたします。

●一般社団法人 CSV 開発機構 近江氏

CSV 開発機構上席研究員として、なんかかっこいい名前になっていますけれども、近江と申します。

今日は、ネイチャーポジティブ経済移行を埼玉県内企業の産業競争力向上の好機にしましようというタイトルをいただきまして、15分ほど、皆さんの発想転換にお手伝いできるようなことをお話しできればなと思っています。

3回目になったので、毎回ちょっとずつ内容を変えているんですけど、もう3回目の方もいらっしゃるということですね。僕が誰かというのは細かいのでわかりづらいんですけど、後で資料はお配りすることになっていると思うので、ぜひ見ていただいて、早速内容の方に入っていこうと思っています。

全体を通して、基本的な考え方として、皆さん今日企業の方もいらっしゃっているので、自社の経営資源と事業活動というところから、ネイチャーポジティブにどういうふうに自分のところのリソースをくっつけることができるかなというようなことを今日はこの機会に棚卸をしつつ、誰かとこう、くっつく、仲間も増やす取組に役に立てていただいて、あわよくば、困っている人、困っているクライアントの、ネイチャーポジティブへの参入をお手伝いする立場になっているということを考えると、一緒にその事業を高付加価値化するということを考えられるんじゃないかなというふうに思っています。

その辺をベースにしながら少しお話を進めていこうかなと思っています。

今年の7月ですけれども、ネイチャーポジティブ経済、いわゆる生物多様性保全、保全をするというところに後ろに経済がくつついたんですね。このネイチャーポジティブ経済移行戦略というのが7月に閣議決定されました。ロードマップが出てきたんですね。

細かいことは、この場ではご説明しませんけれども、まさに今年から来年にかけて、これについてもいろんな政策、制度が議論されている真最中ということです。いわゆるカーボンニュートラルのときもそうでしたけれども、企業としてこれに参加することに何の意味があるの、どこから手をつけたらいいのというのが、民間企業としての悩みでもあり、そこにうまく参入することによって何か事業展開できないかなというチャンスでもあるというふうに考えていただければいいんじゃないかななど。とはいって、コストかけてまで何をやったらいいかというのが決められる状態に今あるかというと、まだネイチャーポジティブ経済というのはどういうふうに評価するのかというのは決まっていない段階なんですね。まさに政府の方でも、いわゆるルールづくり、評価の枠組みをどうやって作ろうというのを今議論していますというようなことが出ていて、逆に言うと、今、埼玉県内でネイチャーポジティブについて、取り組んでいる既に取り組んでいる内容をうまく評価の枠組みに乗っけていってあげると、先行者として、突っ走っていくことができるようになるわけですね。ですので、国が何か言ってくれるのを待ってから始めようではなくて、今のうちに自分たちが持っているリソースを国のスキームの中に押し込んでこうというぐらいの発想で取り組まれていくと、埼玉県初のネイチャーポジティブ経済のメニューというのができていると思って、そこに取り組んでいくというのがまさに絶好のチャンスで、県としてはこういう場を作ることによって、そういうことに取り組む企業さんだったりとか、団体だったりとかというのが生まれてくることを支援していくことになります。

では具体的に考えていくにあたって、少し資料をつけてございますけれども、皆さんお手元

にあるのかな。色々と議論するときに、いくつかやっぱりレイヤーを整理して議論、目的を絞って議論しようということもあって、よく言われるのが環境というのは、経済と社会と、3つの軸でもって回っていくんですよみたいなことというのは、いわゆる環境政策の枠組みでよく言われているものですが、ネイチャーポジティブもやっぱりそういう枠組みで整理をしていくってみようじゃないかというのがこの図です。それをレイヤーごとに分けて、それぞれ包括した議論をやっていくことによって、2つ領域があると思っています。

1つは既存の取組をネイチャーポジティブ経済に移行する形に変えていくというのが1つです。それで、それを発展させていく。もう1つは新たに生み出すということになろうかと思います。

これもゆっくりやりたいんですけど、ネイチャーポジティブ経済の取組というのが、まず先ほど整理した環境・経済・社会の枠組みで、ゴールをどこに設定するかということなんですが、埼玉県としては「日本一暮らしやすい埼玉」の実現、それから、県内の産業界が本気で取り組めるような官民連携の取組にこれを育てていくというようなことに貢献していくというのが一番大事なゴールの設定なんじゃないかなというふうに思っているところです。

のために、今までこの保全という考え方で環境への取組をやっていて、1回目のときに僕、実は、東京の真ん中で蛍を養殖するというのをやっていまして、蛍を養殖するには綺麗な水が必要ですし、そのためにどういう準備をしなきゃいけないかということが、色々とあったりするのでそれを保全のところで、これボランタリーな考え方でやることが多いですね。後ろに経済が付きましたから、ここで発想転換しなきゃいけないのは、むしろ積極的に増やしていくとか、そこから活用する生かすところにつなげていくということで、今まで企業の中ではCSRの取組、ボランティアとか寄付するみたいな枠組みでやってきたものを、今度はビジネスに変えていかないかやいけないということになろうかと思います。

実際にどんなことをやっていくといいかなというので、皆さんのお手元にも資料があるようなので、かいつまんでご説明していこうかと思うんですけど。

例えば、埼玉県内にも、この熊谷市のあちら側の山の方には200個ぐらいいため池があるんですね。これは三方五湖って福井県の事例ですけれども、これ実は船屋なんですね。船がここにいるんですけど、船の前のところに、ヒシが茂ってしまったんですね。船が航行できない状態になっています。それで、毎年これを駆除するのに結構なお金をかけてやっているんですね。それを産業廃棄物として捨てていくんじゃないなくて、実はなんか資源に変える方法ないかというので、この炭化力発電システムというのを実は一緒に、実験しまして、これ高槻のバイオチャーエネルギー研究所の開発した技術なんですけど、おそらく埼玉県内にもこの手の技術力を持った会社さんというのがいるはずなんですね。もちろんこの高槻バイオチャーエネルギー研究所さんと組むという手もありますけれども、福井県の三方五湖のヒシを使って、炭化してボイラーをまわしてバイナリー発電をしようという発電の仕組みを作る。これまだ実証の段階ではあるんですけども、それなりにビジネスが回るんじゃないかなということが検証されている最中です。

もう1つ別な猪苗代湖です。福島県ですけど、今度はヒシって、実を食べられるので、あれを使ってお茶を作っているんです。実はこれ、めちゃめちゃ流行っているんです。そこで売り上がった売上高を還元して、作業のフィーが出てくるという、自活していく仕組みができつつあるんです。企業も潤って地域の問題解決・課題解決にも繋がっているという事例です。

それから最後にもう1つだけ、これももう25年ぐらい前なんんですけど、小笠原の資源循環型の島づくりというグランドデザインづくりをお手伝いしました。それをやっている最中に林野庁の女性の方が、突然、今度こういうツアーやるからと言って始めたのが、この、小笠原の母島という島があって、そこにオガサワラグワという非常に硬い木、固有種の木があって、それが仏壇にいいってどんどん切られちゃったんですね。切られちゃった後に、アカギという成長の速い木が繁茂してしまって、固有種であるオガサワラクワがどんどん、追いやられてしまうという状態になっているんですね。これを何とかしなきゃいけないというので、林野庁のその方が、アイデアを最初に出したんですけど、これ今も実は続いているんですよ。アカギというのは成長が早い木なんんですけど、それを結構根が横に張るので、どんどん切ってしまうと土砂が流出してしまうんですね。ですので、ゆっくり下の環境が育つようにして、枯らす方法とし巻き枯らしという手があるんですけど、表層の部分を剥がしていく、そうすると水が吸い上げ

られなくなつて、ゆっくりと枯れしていく。それで、根は張つたままなので土砂はそのまま掘んでいてくれるというやり方があつて、アカギとか、モクマオウとか、ギンネムとか、外来種をそんな形で緩やかに枯らしていくということをやりつつ、植生を変えていくというようなことをやっていて、面白いのはこれツアーニにしちゃつたんですね。お手伝いしてくれる人大募集といって、パッケージツアーニして、この作業をしてくれる代わりに、島の中を色々案内していくというガイドツアーニでやっていくというものを、普通に行つたのじゃ入れない、南島に入れるツアーニパッケージで組みました。そしたら、100名の枠で募集したんですけど、本当にもう一瞬で大人気となりましてですね。今もこのツアーニは、森林総合研究所と、関東森林環境局のジョイントベンチャーとして続いています。ツアーニしているかどうかってちょっとあれですが、いずれにしても、何かの作業をしてもらって、それをもう少し旅として面白い状態に仕上げたというと、それが、それ自体が地域の観光資源になるんですよというのがあります。

なんていうふうに、皆さんの周りを見回していただいて、各市町村の持つている特徴を使って、どんなビジネスができるかなというのを、皆さん今日は色々とアイデアを出し合う場に来ていただければなというふうに思います。